

戦後日本の社会と日本人の人間関係

—日本人はどう変わったか—

花 見 楨 子

はじめに

最近出版された、中国人留学生の日本に対する声を集めた本を読むと、ある共通した日本人評が繰り返し出てくる。いくつかを拾ってみると、「日本人は表面はとても優しいけど、心が冷たい。……即かず離れずで、どこまでいってもお互いに解け合っていない感じ。……遊んでる間はとっても楽しい。でも遊び終わったらそれでおしまい。それ以上に発展していかない。……私は私、あなたはあなた、お互いに距離をおいていて、隣近所ともあまり親しい交流はないみたい。」¹⁾「日本人は表面では非常に親切で、礼儀正しい、最初のうちはとてもつきあいやすい、しかし、深く突っ込んで付き合うことが難しい……表面でしか付き合えない……つきあいから「金銭」を排除する……もし、金銭面に抵触してくれば、つきあいのほうを切り捨てる。……日本人は非常に金銭面でのけじめがはっきりしている……お金のことしか考えていないように見えてくる……深くつきあいたくとも、突き破ることのできない壁のようなものを感じてしまう。迷惑をかけちゃいけない、遠慮しなくてはならないって身構えてしまう……」²⁾「日本にきたほとんどの中国人が、日本人は冷たいと言いますね。……そこらへんでのちょっとした付き合い……日本人はそうした面では非常に親切ですね。……つきあいが増えてくる、親しくなってくる、そしてある程度までいくと、それでストップしてしまう……なぜかと言うと、日本人は問題が起きて、面倒なことにならないように警戒してしまうからなんです。金銭の問題とかですね。それで一定の

距離を置こうとする。……日本人はものすごく忙しい、しかも心に鎧を着ている、警戒心が非常に強いということではなかなか友人ができないんですよ。」³⁾

まとめると、(1) 日本人は表面的には親切であるが、(2) 互いに距離を置いて、深い付き合いになることを避ける、(3) それは、面倒(特に金銭面の)に巻き込まれることを警戒するからである、ということになる。

むしろ、こうした日本人評の対極には中国人自身の人間関係のあり方が強く意識されている。すなわち、中国人はただの付き合いでは冷たいが、一度友人になると非常に親切になってくる、親しくなれば、お金をやったり、もらったりも普通のこと、あまり気にしないし、自分と相手の区別がなくなって兄弟姉妹のようになる、などである。

こうした評価を、直ちに日本人と中国人との「国民性」ないし「民族性」の違いと受け取るのは妥当ではあるまい。ただ、上記のような日本人評がかなりの的を射たものであることは疑いがない。「客観的な調査」に基づく評価でなくとも、同時期に一定の文化的背景をもったかなり多数の人々が同様の観察を行っているということには無視できないものがあるし、何よりもその内容が日本人の多くにとって心当たりのあるようなことである。問題は、これが時の流れを越えて、日本人という集団の固定的性格として解釈されることである。

戦後まもなく、日本人の「国民性」を論じて一躍有名になった本に、アメリカの文化人類学者、ルース・ベネディクトの「菊と刀」⁴⁾がある。この本は、日本人の主要な行動規範を網羅し、その関連性を包括的に論ずる上で洞察力に富み、しかも作者がそれを一度も日本を訪れることなくやってのけたということで評判になったが、一方で痛烈な批判を浴びた。西欧文化を「罪の文化」、日本の文化を「恥の文化」とする二分法への批判がよく知られているが、基本的には、歴史性と地域や階層間の差異をまったく無視して、日本人を総体として論ずることに関する批判であった。⁵⁾その後文化人類学の領域においてはこのような研究手法は影をひそめたが、一般には今も昔も(日

本人を含めて)よく陥りがちな文化理解の態度である。

ここでは、指摘された日本人の人間関係における特色を、戦後の日本社会の特性との関連で検討してみたい。

1 「古き良き」日本人の人間関係

上記の中国人留学生の日本人評を聞いて、いや、しばらく前まで日本人はこうじゃなかった、と考える日本人は案外多いだろう。どちらかと言えば、中国人の人間関係とされているものに懐かしさを覚えるくらいなのである。

例えば、年輩の日本人の中には昔の「下町の付き合い」を懐かしむ人が結構いる。庭や塀といったものがなく隣家と軒を接して建ち並ぶ家々、子供が遊び、大人達が立ち話をする、夏の夕方には縁台を出して涼むといった風で、絶えず人影の見られる路地、井戸端会議の場となる共同水道などを舞台に繰り広げられる「遠慮のない、暖かい付き合い」があったと言う。⁶⁾ イギリス人の社会学者ドーアは1950年代半ばに東京の下町に住んで調査を行い、住民達の密接な人間関係や暮らしぶりを報告している。⁷⁾ それによると、近接性を基盤とした社会関係の中では *privacy* を保つことはほぼ不可能であるが、その点をあきらめ、かつ近隣の日常習慣を受け入れるならば、誰でも互助的な親交の仲間になることができる。それぞれの家に自由に入出入りし、家を留守にするときも近所の目が光っているから心配ない。おかずのおすそ分け、食材の貸し借りは日常茶飯事、家族が病気にでもなれば近隣中が心配して手助けし、就職や見合いの世話をやき、保証人をかってでる。金の貸し借りも当たり前のように行われ、電話のある家は近所中の呼出に応じ、誰にでも快く使わせる。こうした関係がその真価を発揮するのは近隣に死者があった場合である。総出で葬式の手配万端を取り仕切ってしまう。

これらはしかし、「下町」という、都市下層の住宅密集地に独特の人間関係であって、日本の社会全体に広くみられるものではないという人もいるだろう。だが、農村には農村の地縁・血縁に基づく伝統的な相互扶助の人間関係があり、山の手と呼ばれるような都市中・上層の間でも、下町に比べれば表

面的な近隣関係に代わって、親族や出身校の先輩・後輩関係、その他の恩顧関係などのネットワークがあり、物心両面にわたる援助と依存の関係は家族の範囲を越えて広がっていた。すなわち、個人や個々の家の経済的自立が今よりずっと困難であった時代に、経済力や影響力のある者（家）がない者（家）を庇護し支える習慣は広く行われ、それは多分に情緒的關係をも伴うものであったと言えよう。

2 高度経済成長期の社会変動と「私生活化」

「古き良き」人間関係は戦後のある時期より急激に失われて今日に到る。今世紀以降、日本人の価値観や生活様式にとって大きな転機となったのはまず、1945年の敗戦である。このときの変化を作田啓一は、貢献価値の低下と充足価値の上昇という言葉で表現している。⁸⁾すなわち、家や国に代表される個人を越えた存在への奉仕に価値をおく生き方から、個人の私的欲求の充足を第一とする生き方への転換である。確かに、天皇中心の国家観の崩壊の中で食うや食わずの日本人の状態を端的に表現したものと言える。しかし、敗戦から1950年代半ばまでの時期は、日本人の生活が戦前の水準まで回復する時期であり、社会構造自体はまだあまり変わらない。平均家族員数は戦前と同じく5人程度であり、直系家族の伝統が保持され、農業を中心とする自営業が多数を占めている。⁹⁾日本人はこの時期、廃虚の中に残された伝統的生活基盤に否応もなく依存して経済力の回復を計ることに邁進する。

日本人の生活様式と人間関係が真に決定的な変化を経験するのは今少し後、つまり1950年代末から1973年の石油ショックまでの高度経済成長期である。ここに到って、農民層の減少、賃金生活者の増大、都市への人口集中、核家族化の進行、高校大学への進学者の増大が顕著となる。¹⁰⁾日本人は経済力の増大を実感するようになり、「消費革命」という言葉が流布する。核家族が恒常的に経済的自立を確保し、親族、知己等への依存度を急激に減少させるに比例して交際の中身は情緒的なものから多分に儀礼的・形式的なものに変わっていく。

農村の生活にも変化が訪れる。古い農家が建て替えられ、伝統的な縁側や
囲炉裏がなくなって、何気ない団らんの方が消える。兼業化が進んで皆忙し
くなり、あまり家にいない。電話が普及するとちょっとした用事は電話で済
んでしまうのでわざわざ訪問することはなくなる。これを「農村の都市化」
というなら、人口の急増する都市では「都市の農村化」とも言うべき現象が
起こる。東京の前進の江戸は17世紀末には人口100万を擁する世界一の都
市となっており、18世紀末には生え抜きの「江戸っ子」の間の連帯意識が生
まれていた。「たとえ見知らぬ人でも困っている者には一肌脱いでやる」と
いった、いわば都市の倫理のようなものが育っており、それが前掲のドーア
の研究にあった、下町の人間関係にまで受け継がれていた訳であるが、高度
経済成長期に大量に都市に注入した農村出身者たちは、基本的に見知らぬ人
たちに対しては無愛想であり、不信感を抱いている。彼らの出身地である農
村での親しく暖かい人間関係というものは生まれながらの顔見知り同士を前
提としており、まったくのよそ者とその輪の中へ入るのはなかなか難しい。
そこで、こうした人たちの溢れた都会の人間関係は殺伐としたものとなり、
「東京砂漠」という新語が生まれる。食堂のウェイトレスに店の売り子、バス
やタクシーの運転手、役所の窓口の係員等の愛想のなさ、不親切さが目立っ
た頃である。¹¹⁾

高度経済成長期に生じた日本人の価値意識の推移を宮島喬は *privatization* (私生活化) と表現している。¹²⁾ すなわち、社会への貢献よりも、自己の
趣味に合う、ゆとりある暮らしを選び、個人の幸福があってはじめて全体の
幸福があると考え、私生活中心の人生観が日本人の多数を占めるようにな
ったと言う。この頃の、こうした意識を表す流行語として想起されるのが和
製語の「マイホーム主義」である。そして、NHKの1977年の世論調査で
は、「社会のことを考える前にまず自分の生活を大切にする」との回答が実に
81%を占めた。¹³⁾ この頃の経済成長は確かに、個人所得が核家族の基本的自
立を保証し、さらにより「豊かな」消費水準の追求を可能とする状態を生み
出している。

それでは、こうした「私的価値」が日本人にとって真に肯定的な原理にまでなったのだろうか。核家族の経済的自立は、その働き手を中心に家族周期が理想的に進行することによって保証される。ひとたびそこに狂いが生じたときの社会的所得保証の制度は、日本にあっては高度成長期が進展してもまことに心許ないということを大方の日本人は知っている。一方で、かつて個人や家族を社会に結び付けていた、地縁や血縁による共同体は消失しつつある。従って、核家族が崩壊するときに頼っていく所はない。さらに、高度経済成長期も1960年代に入ると、公害などの「環境問題」が発生し、住民運動が展開される。個人や家族の力では解決されない問題の存在を日本人は意識せざるを得ない。個人の幸福の追求が全体の幸福へ単純に結びつかないどころか、個人の幸福自体が脆い土台の上に立っているかも知れないことへの漠然たる不安が意識をよぎることになる。ここに、「私的価値」は根本的な問題をはらんで、真に肯定的な原理とはなり得ない。

3 高度経済成長期の生活意識類型

1970年代になると、高度経済成長期の日本人の生活意識や社会意識を、全国的規模の調査から得られたデータをもとに分析する研究が行われる。

田中義久は、1973年と74年の全国調査に基づいて、現代日本人を4つの主体類型に分類した。具体的には、ふたつの質問項目（個人の「生きがい」に関するものと、社会全体より個人優先の生活態度への賛否を問うもの）を選び、それぞれへの回答項目をふたつのタイプに分類し、それらを掛け合わせて出てくるのが次の4つの類型である。（「生きがい」に関しては、快楽や安寧、周囲の人間関係の調和を求めるものを「即自的」生きがい、自己の能力の開発や社会的使命を求めるものを「対自的」生きがいと呼ぶ。）

- 1) 「対自的」生きがい＋「非個人優先」の生活のかまえ＝個的自立が社会的存在としての認識によって裏付けられている主体類型（個の類型）
- 2) 「対自的」生きがい＋「個人優先」の生活のかまえ＝私としてのみ主体的で、社会的存在としての認識が低い主体類型（私民の類型）

3) 「即自的」生きがい+「非個人優先」の生活のかまえ=日常の生活過程に埋没しているが、社会的紐帯は感じている主体類型(庶民の類型)

4) 「即自的」生きがい+「個人優先」の生活のかまえ=個としての自立性・対自性を確保していない、未分化な状態の主体類型(大衆の類型)

これらの類型が73年、74年の調査で回答者に占める割合は、「大衆の類型」が最も多くて42~47%、「庶民の類型」が15~20%、後のふたつの類型はいずれも11~13%であった。¹⁴⁾

野村総合研究所などの主催した生活意識調査では、因子分析によって多数の回答項目の関連をとらえ、大人主義、自閉主義、伝統主義、主体性志向の4つの意識類型を抽出した。¹⁵⁾次に、やや長くなるがそれらの特徴をまとめてみよう。

大人主義の人間は、時代に遅れないよう、大勢の動きに適応していくことを基本とし、皆と力を合わせて世の中を良くしてゆくべきと考え、人に喜ばれることを進んでやりたい、人を頼るより人から頼られる人間になりたいと思う、一見すると社会改革派、行動派ともとれるような意識を示すが、タテマエとホンネの分離という今一つの特徴を持つ。戦後の新しい価値、民主主義を善と信じ、奉じてはいるが、それを真に理解し、共感して自分の行動原理となるまで消化しているとは言えず、むしろそれが時代の潮流だから、いわば処世術として利用している。消費者運動や住民運動についてはその必要性は認めるが自分から積極的に行動を起こすようなことはせず、運動が盛り上がってくれば follower として加わるが、下火になれば離れていく。自分自身ではどんな行動の核も持たず、それ故にどんな社会の動きの変化にも合わせていくことができる。しかし、信念も自信もない根無し草であることに変わりなく、現代の社会構造を総体として理解し得ないため、常に心の底には不安を抱いている。マスコミの情報に対する関心は高く、それが自分の意見であるかのように迎合しやすい。彼らにとっては、家族が最大の拠り所であり、家庭内では互いに依存し合い、責任転嫁をしつつ暮らしている。¹⁶⁾

自閉主義は、根底に人間に対する抜きが悪い不信感を抱いており、代わり

に非人間的なシステムにより信頼をおく。この場合システムとは組織や制度や論理を指し、どちらかと言えば安定した、権威あるものが好まれる。その典型は「企業」であり、自分を裏切ることなく守ってくれる唯一の拠り所として執着する。自閉主義の人間が上司の命令は絶対としていついかなる場合も断れないのは、その上司の個性に惹かれているからではなく、それもシステムの一環として考えられているからである。自閉主義の人間はシステムの権威に依存し、最終的に自分に対して責任がもてない。公害問題などに対しては関わりを持たない。自分の拠り所とするシステムの変化を恐れ、保守的になる。自分の殻に閉じ込めり、誰にも自分の内面は明かしたくないと考える。面倒な人間関係はできるだけ避ける。生活は、その日その日を不自由なく、楽しく過ごせればそれでいい。家庭にあっても、家族個々人が自分の殻を持ち、必要なときはシステム型の権威主義で全体を統率したがる。¹⁷⁾

伝統主義の人間は、家庭の中に家父長制を受け継ぐ権威主義を維持してゆきたいと考える。父親は一家の主であり、外に対する一家の顔である。母親は常に夫を立て、家庭内の切り盛りを受け持ち、内助の功に励む。子どもたちは父親に対し絶対服従し、長男は結婚後も親と同居し、老親の面倒を見る。子供の結婚式には金をかけて家の恥にならぬようにする。親族は家族の延長であり、古いしきたりを守ることによって一族の和を計らねばならないと考える。また、近隣関係においても、相互に助け合い、団結してよそ者に対抗しようとする。職場を選ぶときは、労働条件が良く、福利厚生面が整っているといったことを第一に考え、職場では人の和を最も大切と考える。もし上司が特別良く面倒を見てくれるなら、誠意を尽くしてその上司に仕えることに価値を見いだす。¹⁸⁾

最後に主体性志向の人間は、夫婦はそれぞれ自立した人間同士の愛情による結びつきであるべきで、家庭はすでにあるものではなく、夫婦が子供と共に作っていくものとする。彼らは親族には依存せず、核家族中心主義である。よりよい社会環境を作り出すために地域の人々と協力しようとするが、なれ合いや依存、強制は良くないと考える。各自が自分の意志に基づいて参

加することを大切にす。職場を選ぶときは、自己の能力を発揮できる所、個性を生かせる所を第一に選ぶ。既成の価値にとらわれず、自分が本当に何を求めているのかを絶えず自分に問いかける。大切なのは自分自身であり、なによりも個性を重んじる。自分や家族の利益といった範囲を越えた、より広い視野をもって将来の生活や権利を守ろうとする。ただし、主体性志向の人間にはふたつのタイプがあり、一つは、社会経験を積み重ね、長年にわたる社会との葛藤や苦勞の末に自己の主体性を確立した人で、今一つは、いまだ経験を持たないが故に価値基準のままに単純に行動できる、いわば無邪気なタイプである。¹⁹⁾

次にこれら4つの意識類型の世代別分布を見ると、大人主義はどの年齢層にも広く分布しており、際だった世代差はないが、45歳から55歳の年齢層で特に多くなっている。この年齢層は、第二次大戦末までの天皇制軍国主義イデオロギー—辺倒の時代に少年期から青年期を過ごし、その後社会体制の根底的变化を体験し、主義や体制の脆さを身をもって知った世代と言える。こうした激動期を通過する過程で、どのような事態にも対応できる柔軟な態度を身につけたと考えられるが、大人主義は必ずしもこのような特殊な体験の所産ではないらしい。すなわち、どの世代にも広く分布していて、どうやら日本人にとって最も普遍的な精神構造と言えるようである。

自閉主義は、若年層と高年層の両方に分かれて分布しており、中年層には少ない。高年層の場合は、戦前から戦中の思想・行動統制の時代に自己抑制を強いられ、また、戦後の価値転換に即応できず周囲から孤立し、社会に対する不信や不満をつのらせて自己の殻に閉じ込められるようになったケース等が目立つ。30歳未満の若年層の場合は、高度経済成長期に思春期を過ごし、受験競争が加熱する中、家族や所属集団内での人間関係に恵まれなかった経験や、地方から都会に出てきて新しい人間関係になじめなかったりしたことから自閉主義になるケースが確認されている。

伝統主義は若い層ではほとんど見られず、年齢が上がるほど増加し、特に60代以上の層に多い。伝統主義の人々は、大都市よりも郡部や地方小都市な

どで、やはり伝統主義権威主義的傾向の強い、地域では名のある家に育ち、さらに父親が小学校長や神主などの職にあって、周囲からは特別の目をもって見られていたことなどが多い。こうした伝統主義を支える親族や地域的な基盤は今日失われつつあるので、現在すでに高齢化している人々と共に伝統主義自体が消えていくことが予想される。

最後に主体性志向はまず戦後生まれの若年層、中でも大学生に多いが、これは高度経済成長期に恵まれた社会環境の中であまり束縛や葛藤などを経験せずに伸び伸びと育ち、知識としての主体性志向を素直に学びとった層が中心のようである。従って、彼らが今後社会の中で様々な問題に直面していく過程でこの志向が強化されるか、それとも大人主義や自閉主義に変化していくかが問われる。高年層では、組合運動や、公害反対運動、住民運動のリーダーを担ってきた人たちの間に主体性志向が典型的にみられると言う。²⁰⁾

前期の田中義久の4類型とこれら4類型を比較してみると、いくつかの問題に気づく。田中の大衆の類型は4類型の中で最多数を占め、privatization(私生活化)の傾向をよく反映しているが、野村総研の大人主義とは理念的に必ずしも一致しない。大人主義それ自体は現実の一面をよく表しているようであるが、こちらの分類では私生活化の傾向はどちらかと言えば自閉主義の中にあるようである。いずれにせよ、野村総研の類型にはこの時期の価値変動の主要テーマとも言える「私生活化」が全面に出ていないということは、調査票の質問項目にそうしたテーマを反映したものが入っていないということらしい。これらふたつの類型化の中で内容的に最も無理なく一致するのは、田中の「個の類型」と野村総研の「主体性志向」であろう。同じ4類型に落ち着いても、野村総研の因子分析法による分類はどの類型も十分に現実味があるのに比べて、田中の場合ふたつの質問項目を機械的・論理的に組み合わせる4類型を導いているため、「個の類型」と「大衆の類型」を除く他のふたつの中間的類型は今一つ性格がはっきりつかみにくいという難がある。ドーアの「下町の人間関係」に現れた、わけへだてない相互扶助関係を旨とする生活意識が「庶民の類型」にあてはまるのだろうか。

次に、これらの類型的意識を持つ日本人が外国人(留学生を含めて)に遭遇した場合の対応の仕方を彼らの人間関係に対する態度から推測してみよう。大人主義の人は、現在国際化ということが社会の各層で叫ばれ、肯定的価値となってきていることに対し敏感に反応する。従って、外国人を日本の社会に受け入れることはよいことであるとし、自分の子供が国際人と呼ばれるにふさわしい資格を備える(例えば、英語がしゃべれるようになるとか、留学するとか)ことを期待してさえいる。自分自身も外国人にできるだけ親切にしたいと考え、親善の役を果たせたらと思う。そこで実際にそのチャンスが訪れると大変愛想よく振る舞う。が、それ以上にどうしたらよいかわからなく、文化の違う人間に対してははっきりと自分の行動原理として示せるものもないので戸惑うばかりである。日常生活に直接関連することを少し話すともう話題にも窮してしまう。国際親善とは肩のこるものだと思ってしまう。日頃考え方や行動の似ている人々との付き合いの気楽さに思い到り、自分は国際親善には向いてないと思う。あるいは無理して少し付き合ってみても、相手が日本人同士のようにこちらの立場を考慮して振る舞ってくれないので、ノーのいいにくい性格の自分がだんだん相手のために無理を重ねて、そんな自分に対しても嫌気がさしてくる。また、相手が自分の行為を無邪気に信じてより親密な関係を期待している様子なのも気になってくる。自分はそんなところまでは考えていなかったのに、このままではとことん面倒を見なければならぬことになってしまうかも知れないから、あまり深入りしないうちに線を引いておいたほうがいいのかのではと心配する。そうした自分の心情をどう説明したらよいかわからないので、何となく今までとは違ったよそよい態度で示すことになり、相手を混乱させる。

自閉主義の人は、職業上の関係等で外国人と接触することになった場合礼儀正しくは振る舞うが、それ以上個人的に付き合おうとは思わない。伝統主義の人にとっても大方の外国人は得体の知れないよそのものであるが、外国人の中にもたまに日本の伝統的文化に深く心酔して、並の日本人よりもよほど話のわかる人間もいると知り、そういう外国人に対しては自己の知識・経

験・信念等を喜んで語って聞かせる。

主体性志向の人は、相手が外国人であることにさほどこだわらない。相手の個性や考え方に興味を抱き、相手を知ろうとし、自分をも理解してもらおうとする。互いに相手に共感すれば友人になる。外国人にも日本の社会で暮らす権利があると考え、彼らの力になろうとする。

このように考えると、外国人にとって基本的に友人になれそうな日本人のタイプとは、主体性志向の人間、田中の「個の類型」に属する人ということになるだろうか。問題はこれらのタイプが（あるいはそうした要素を幾分なりと備えた人々でさえ）日本人の主流にはなっていないことであり、留学生達から、初めに掲げたような批判が出るのもやむを得ないのが現状である。

4 高度経済成長期の終焉と日本人

高度経済成長が終わり低成長期に入りつつある現在、そして今後、日本人の意識やその反映としての人間関係はどの方向へ変化していくのだろうか。

すでに高度成長期の最中から、公害問題の発生にみられるような、私生活化一本やりの限界、核家族制の基盤の脆さ等が露呈し始め、「真の豊かさ」を実感し得ない者の不安感を日本人が抱いていることは前に述べた。20世紀もおわりに近づいて、この不安感をいっそうつものらせるのが高齢化社会到来の予測である。核家族制の定着、女性の社会進出の一般化、都市住宅の狭小化等が高齢者との三世同居を難しくしており、現状に対応すべき公共の制度や施設の整備はなかなか進まない。さらに、国際社会の変動と国内社会の多様化が一層の問題を日本人に突きつけている。留学生、外国人労働者、定住外国人が増加する。国の内外から各種の戦時補償を求める声が沸き上がる。国際貢献のあり方が問われ、自衛隊の行動と憲法の関係が問題となる。

こうした状況に対し、大人主義の強い者、自閉主義の者は自ら積極的に関わることはない。国民多数の政治的無関心は当分変わらないのかも知れない。だが、自分達の作り出してきた（あるいは許容してきた）戦後政治をほとんどあきらめている日本人の中でも、近年各種の新しい動きが出ていることは

確かである。それらの多くは「草の根」と呼ばれる市民や地域住民を中心とした活動であり、それらグループ同士のネットワーク作りである。高齢化社会、在日外国人、留学生、女性問題、環境問題、国際協力等々、活動の主旨やテーマは様々であるが、今まで見知らぬ同士の日本人が、年齢、性別、職業、階層等を越えて、一つの社会的目的のために自分達の力で零から活動母体を作り出している。こうした新しい組織作りは、かつての血縁や地縁に基づく共同体的な人間関係や、政府、企業、学校等の既存の組織に依存した人間関係とは異なる関係を作り出すものとして期待できよう。なぜならば、新しい組織作りを担う人たちは、多かれ少なかれ主体性志向を持つ人たちであり、より豊かな住みよい社会を作る作業を一部の政治家などに任せてはおけない、「私生活」の中だけでは到底満足してられない人達であるからである。

これらの日本人達がそれぞれの組織的活動を通して地域生活と自治体のあり様を少しずつ変えていくことによって、留学生やその他の外国人の目に写る「日本人」というものも好ましい方向へ変わっていくのではないだろうか。

*本稿は、1992年8月に行われた、留学生のための社会科学基礎セミナーでの講義内容をまとめたものである。

- 1) 鋤柄治郎、鈴木章子編「あなたは日本人が好きですか—中国人留学生の声」(黄河、1992) 87-88頁
- 2) 同書 113-116頁
- 3) 同書 183-184頁
- 4) ルース・ベネディクト著、長谷川松治訳「菊と刀—日本文化の型—」(現代教養文庫、1967)
- 5) 同書に対する批判は多数あるが、主要なものをいくつか挙げると、有賀喜左衛門「『菊と刀』の与えるもの—日本社会構造における階層制の問題」(民族学研究 14 (4) pp 13-22)、川島武宜「『菊と刀』の与えるもの—評価と批判」(民族学研究 14 (4) pp 1-8)、柳田国男「『菊と刀』の与えるもの—尋常人の人生観」(民族学研究 14 (4) pp 28-35) など
- 6) 石川弘義「日本人のライフスタイル—新生活感覚の研究」(マネジメント

- 社, 1979) 96-103 頁
- 7) R. P. ドーア著「都市の日本人」(岩波書店, 1962) 197-213 頁
 - 8) 作田啓一著「価値の社会学」(岩波書店, 1972) 272-294 頁
 - 9) 蓮見音彦也編「日本の社会 1—変動する日本社会」(東大出版会, 1987) 73-74 頁
 - 10) 同書 74-100 頁
 - 11) 祖父江孝男編「日本人はどう変わったか」(NHK ブックス, 1987) 20-32 頁
 - 12) 宮島喬著「現代社会意識論」(日本評論社, 1983) 149-180 頁
 - 13) NHK 放送世論調査所「参院選後の政治意識」(NHK 世論調査資料集, 1980) 27 頁
 - 14) 田中義久著「社会意識の理論」(けい草書房, 1978) 177-185 頁
 - 15) 生命保険文化センター, 野村総合研究所編「日本人の生活価値観—将来社会展望のために—」(東洋経済新報社, 1980)
 - 16) 同書 19-24 頁
 - 17) 同書 24-27 頁
 - 18) 同書 28-30 頁
 - 19) 同書 30-32 頁
 - 20) 同書 32-29 頁

(一橋大学専任講師)